

帝国主義の腐朽性に抗し  
共同反革命を蜂起-内戦へ！

共産主義者同盟（戦旗派）

# 戦旗

8月5日

5日、20日発行

359号

編集発行人 鹿島 昂

1部 50円

戦旗社

東京都新宿区番衆町10の8  
コーポハッピービルE1号  
電話 03 (356) 2982  
振替 東京26110

## 朝鮮出兵への道

# 8.2三木訪米粉碎！

# 海洋博決戦に猛然と決起 8.10政治集会の大爆発を！

全国の同志、友人諸君！ 戦闘的労働者、学生の皆様！

七・一七「一七」沖繩海洋博粉碎、皇太子訪沖阻止闘争は、安保一「韓」体制打倒へ向けた激闘の三カ月の突破口をきりひらくにふさわしい闘いとしてかちとられた。

この闘いをもってわれわれは、天皇訪米阻止の闘いを頂点とする激闘の三カ月へ突入し、朝鮮出兵を論じ、日帝の反革命的・反人民的攻撃との徹底した対決の段階へと至ったのだ。

三十年もの帝国主義との困難な闘いに勝利し、全世界の被抑圧人民に限りなく連帯と勇気を与えたベトナム・インドシナ人民の闘いをうけつぎ、そしてまた朴独裁と決死的に闘っている韓国民衆に学び、今こそ不退転の決意をうち固め、三木訪米、天皇訪米とつづく安保一「韓」体制強化の策動に対し総決起し、血債にかけて断固として進撃していかなければならない。

七・一七「一七」の闘いをうけつぎ発展させ、それを数倍する闘いをもって、日・米・「韓」反革命支配者共の野望をこなごなに粉碎し、帝国主義天皇制攻撃の一大焦点「天皇訪米阻止」と圧倒的な労働者人民を決起させていくことが問われているのである。

### 七・一七皇太子訪沖に怒りの決起 二千の労働者人民が羽田現地へ

七月十七日、皇族として戦後をはじめて沖繩へ行こうとする皇太子の訪沖を阻止すべく、二千の戦闘的労働者人民は、昨秋フォード来日時をも上回る権力の厳戒体制をもとめ、続々と本蒲田公園へと結集していった。

皇太子の訪沖にそなえ、「本土」から機動隊の精鋭二千四百名をはじめ、装甲車、放水車、指揮車等を沖繩に送りこみ、大弾圧体制をもって沖繩現地の闘いを押しつぶそうと目論んだ日帝は、羽田現地においては未曾有の厳戒体制をしき、会場へ行くまで三度も検問を行うなど、並々ならぬ決意で闘いの前進をはばもうとしたのである。

しかし「沖繩海洋博粉碎」皇太子訪沖阻止の決意に燃える戦闘的労働者人民は、沖繩人民と連帯して断固として闘いの昂揚をかちとるべく、日帝国家権力の弾圧に一層闘いの決意を打ち固め、決起していった。

集会場の本蒲田公園は、次から次へと結集する部隊で埋まり、皇太子訪沖阻止、沖繩海洋博粉碎、安保一「韓」体制打倒のシュプレヒコールがひびきわたり、戦闘的熱気が高ま

っていった。

集会では最初に、関東沖解同（準）より戦闘的決意が表明された。沖解同（準）の代表は、この七・一七の闘いに「われわれの全未来をかけて決起してきた」と固い決意を述べ、皇太子の訪沖を何としても阻止するという力強いアピールを発した。

沖繩青年からするこの決意表明に、全参加者は圧倒的拍手で応え、「沖繩人民と連帯して闘う」「皇太子訪沖阻止」の熱気が会場をおおったのである。

戦闘的雰囲気の中で集会は続けられ、実行委に結集する諸団体から次々に熱烈な決意が明らかになっていったが、わが労共闘の同志はこの日の闘いに臨む決意を「海洋博粉碎、皇太子訪沖阻止を死力を尽して闘いぬく。帝国主義天皇制攻撃に抗し、激闘の三カ月の突破口を切りひらく闘いとして、血債にかけ闘う。五・一三沖繩返還粉碎神田遊撃戦闘、十一・一八フォード来日阻止闘争を継承して最先頭で闘いぬく」と明らかにし、集会参加者の共感をかちとっていったのである。

「沖繩海洋博粉碎」「皇太子訪沖阻止」のシュプレヒコールを力強く発した後、いよいよ部隊は羽田へのデモに出発した。

朝鮮出兵へ向けた沖繩の全島軍事基地化攻撃を決して許さず、血債にかけ皇太子の訪沖を阻止する意気あふれたわが労共闘の四〇〇の部隊が公園からの進撃を開始するや、まわりを二重、三重にも取りまき、すきあらば弾圧しようとする狙っていた機動隊は恐怖のあまり



清水谷から通産省一海洋博協会へ向け進撃を開始（7.19）

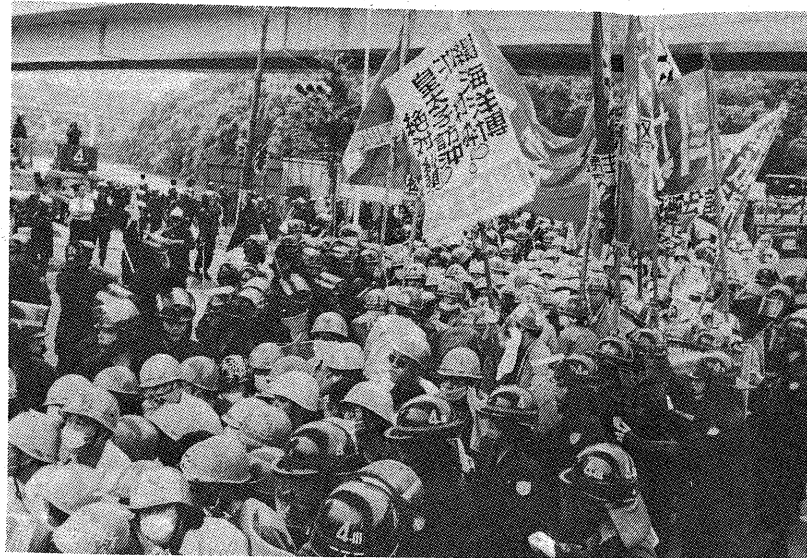
隊列をくずし、指揮者や私服は逃げ出す。その中を労共闘の強固な部隊はずっしりと前進し、態勢を立て直そうとする機動隊にぶち当たって粉砕し押しつぶし、指揮車からの「公務執行妨害で逮捕する」とのどろり喝をものともせず終始機動隊を押しまくる。羽田への断固たる進撃を勝ちとっていったのである。

### 皇太子の訪沖に糾弾の声をうずまく 一七・一九闘争

七月十九日、七・一七羽田現地闘争をうけて、千五百名の労働者、学生、市民の結集をもって、海洋博開催粉砕への一大決起がかちとられた。この日の闘いは、皇太子の訪沖を糾弾し、沖繩海洋博をつうじた安保一日「韓」体制打倒の闘いとして、十七日の羽田現地の実力闘争と同質の実力闘争として闘いとられた。

「七・一九海洋博粉砕、皇太子訪沖糾弾総決起集会」は、清水谷公園で昼過ぎより開催された。発言に立った各団体の代表は、皇太子の訪沖への怒りも新たに海洋博粉砕を訴え、沖繩人民と連帯して闘い抜く決意が次々と表明されていった。

とりわけ沖解同(準)の「ベトナム人民が勝利したように、われわれも最後まで闘い、米軍、日本軍を沖繩からたたき出すまで闘い抜く」との戦闘的決意には、全参加者が「異義ナシ」と拍手で応え、熱気あふれる中で集会をかちとり、つづいてデモに出発した。



破防法弾圧一機動隊の壁を突破するデモ隊(7.19)

沖繩人民の総反対の中で、機動隊をもって力づくで沖繩に行った皇太子に対する糾弾の決意をみなぎらせ、怒とりのごとく進撃する労共闘の部隊は、十七日の闘いを倍する戦闘精神で終始その日の闘いをけん引していった。赤坂見附、アメリカ大使館そして海洋博協会がおかれている通産省の前で、部隊は機動隊の阻止線を突破し、多くの市民の見守る中で果敢なデモンストレーションを展開しぬき、海洋博粉砕、安保一日「韓」体制打倒を訴えていったのである。

労共闘部隊の突出した闘いに恐怖した権力は、遂に指導的同志を奪い去るという暴挙を行ったが、三〇〇の赤ヘル部隊は不屈の進撃をかちとり、安保一日「韓」体制打倒の突破口をきりひらいたのである。

### 激闘の三カ月への総進撃をきりひらいた七・一七―一九闘争

総力をふりしぼり闘い抜いた海洋博粉砕、皇太子訪沖阻止闘争は、今秋天皇訪米をメルクマールとする安保一日「韓」体制打倒へ向けた激闘の三カ月の突破口をきりひらいた闘いとして、第一の意義を有している。

朴反革命カライ政権は、ベトナムにおける米帝の敗退、チー政権の打倒の中に自らの将来を見、それ故韓国国民衆の闘いに対し限らない憎悪をいだいて弾圧の姿勢を強めている。それが「北の南進」を口実とした戦争体制の構築であり、「民防衛隊」「学徒護国団」「戦闘予備隊」など戦闘組織への全人民の動員と、他方での「緊急措置」「社会安全法」などによる闘う人民の徹底した弾圧として進められているのである。

朴の凶暴な人民弾圧、二重の戦争体制への突入と軌を一にして日帝が朝鮮出兵を今や遅しと狙っていることは、この間の一連の政治過程がはっきりと示している。

まさに朝鮮を最後の生命線とした日帝の、朴政権の維持のための安保一日「韓」体制の決定的強化、自衛隊の朝鮮派兵への絶望的策動をはっきりと見すえ、帝国主義天皇制攻撃としてかけられてきている日帝国内の権力再編に抗し、日朝連帯の断固とした闘いの構築が迫られているのである。

それ故、今秋天皇訪米を一大頂点とする安保一日「韓」体制打倒へ向け、われわれは激闘の三カ月に何としても勝利し、蜂起・内戦へとまい

# 労共闘笠置議長不当逮捕さる!

全国の同志友人諸君!

七・一九の闘いにおいて、権力は全国労共闘の笠置議長を不当逮捕するという暴挙をおこなった。これは、この間笠置同志が戦旗派の隊列の最先頭に立ち一貫して戦闘的闘いをけん引してきたことへの報復であり、何よりも三木訪米、天皇訪米阻止の闘いの爆発をおそれる予防反革命の攻撃である。

われわれは、闘いが激しくなればなる程一層強化される日帝国家権力の弾圧に決してひ

るむことなく、そのような攻撃が人民の革命的前進に対する最後のあがきであることをはっきりと見すえ、今秋天皇訪米を日本労働者人民の一大決起で葬り去る闘いをもって応えていかなければならない。弾圧の強化は、闘いの爆発をもつて粉砕していただくだけだ。

われわれは笠置同志を一刻も早く奪還し、日・米・「韓」の反革命支配者に対する更なる闘いを表現していく決意である。



本蒲田公園に総集した労共闘四〇〇(七・一七)

進していかなばならないのだ。

この闘いに勝利しぬくために、七・一七―一九の闘いを飛躍台として、激闘につぐ激闘を闘いぬき、日本労働者人民の総力で朝鮮出兵を阻止し、日朝人民の革命的連帯をかちとっていかなばならない。

七・一七―一九の闘いの第二の意義は、この皇太子訪沖阻止の闘いをつうじ、安保一日「韓」体制のカナメである沖繩の全島核軍事基地化、海洋博を粉砕すべく闘い抜いたことである。

海洋博が沖繩を極東における「ストロングポイント」として打ち固め、海底基地の開発と大陸DNA資源の略奪に道をひろくものであることを鮮明にし、沖繩の反革命統合と一体化されつつなされるそのような攻撃に対し、断固として決起していったのである。

沖繩青年と連帯して闘いとられた国際主義的団結を更に強化し、安保一日「韓」体制打倒、天皇訪米絶対阻止へと共に進撃していくことは不可欠の任務である。

この闘いの第三の意義は、日帝の現下の攻撃の熾烈さと真向から対決する、実力闘争として闘い抜いたことである。

「フォードのとき以上の警備をする」と公言した権力の破防法弾圧体制を突破し、多くの労働者人民の結集のもと、強固な実力闘争として闘いを展開し、安保一日「韓」体制打倒、朝鮮出兵を決して許さないという不退転の決意を日帝につきつけることをつうじ、権力の弾圧体制を大きくゆり動かし、激闘の三カ月の地歩を着実に進めたのである。

われわれはこの決意をさらに打ち固め、革命的猛省精神を発揮して、今秋天皇訪米阻止の闘いにおいても大爆発をかちとらねばならない。

七・一七―一九の成果にふまえ、八・二三木訪米阻止へ総進撃せよ!

八・一〇戦旗派政治集会をかちとり、天皇訪米阻止へのゆるぎない決意と闘いの陣型を打ち固めよ!

# 総破産 ↓ 分解しつつ 右翼日和見主義の馬脚をあらわした足立グループ、西田漂流路線

昨年の狭山決戦や十一月フォード来日阻止闘争をこごとくネグレクトし、今年に入ってから三・一、四・一九、五・一五、六・一五といった安保日「韓」体制打倒、朝鮮、沖縄人民連帯、インドシナ革命戦争勝利等を課題とした重要な政治闘争を全部四十名足らずのキャンパニアに流し、後退につぐ後退、逃亡につぐ逃亡の道をひたはしってきた足立グループは、これまで一切の闘争を革命的に闘い抜かない主要な口実としてきた七・一七、一九、二〇の海洋博決戦において、ついに全面的な右翼日和見主義の馬脚をあらわし、西田右翼漂流路線の総破産を決定づけた。

これまでの大言壮語、左翼的ポーズ、決戦の怒号のすべてがウソっぽくちであり、ベテンのであり、本質においてねっからの右翼日和見主義者であり、右派であることを、ここに至って遂に西田は自己暴露した。

海洋博闘争への取り組みをつうじ、つくりだされた足立グループ内の亀裂↓分解は、今後拡がることはあっても決して止揚されず、歴史的将来における崩壊、自滅は絶対に避けられない必然性のもとにある。

このことを例証することは全くたやすい。海洋博粉砕闘争、皇太子訪沖阻止戦への取り組みをつうじ、何があばきだされたのか。西田右翼漂流路線のどんづまりを知ること、われわれの前進のための糧となりうる。

第一にはその闘争への取り組み、闘い方においてみられた代行主義と右翼日和見主義である。

足立グループがニセ『戦旗』をつうじ、沖縄海洋博粉砕闘争にかんし提言してきたことは、全くもってはなばなしのものであり、打ち上げ花火の連発であった。

いわく一百名の武装部隊をもって沖縄に武装進撃し、五・一三神田遊撃戦を上回る大戦闘を実現する。

或いは又一海洋博粉砕、皇太子訪沖阻止にむけた武装闘争の陣型を構築し、最大の決戦として破防法弾圧をおそれず闘う云々：：：たまにでるニセ『戦旗』の半年以上の主張の一切が海洋博であり、そこでの軍事戦闘であり、決戦であったにもかかわらず、「党としての死力を尽した闘い」の内実はどうだったのか。

沖縄に行った部隊約三十名、残りは六郷土手で集会、糸満市伊原ひめゆりの塔で火炎ビン一名一本：：：である。

このような足立グループの取り組みの三分解の闘いのうち、本質は沈みきった六郷土手の集会にあり、動員そのものにおける組織の二分解、三分解状況の軸も又、沖縄に行ききれなかった部分のなかにある。

ひめゆりの塔で火炎ビンを投げたのは、そうした組織の弱さ、総力戦体制を組み得ない構造の代行であり、一人の闘いで一切を代弁させようという御都合主義、戦術左翼のまやかしののである。

つまり足立グループの大言壮語にもかかわらず、結局彼等は組織として総力をあげて打って一丸となって戦闘に従事できなかったのであり、現状に不満をもって怒りをはった一人が決死の火炎ビンを投げても、六郷土手のだらけた連中はそれで自己の不充分な闘いを代行させているだけであり、決して沖縄解放闘争を主体的に担わんとしているわけではないのである。

だからあくまでも、沖縄人民の決死の闘いの革命性にもかかわらず、足立グループの闘いの質は、だらけた六郷土手にあり、それが西田右翼漂流路線の本質なのである。

別の言い方をすれば、沖縄海洋博粉砕、皇太子訪沖阻止闘争を物質化するにあたり、最も大切なことは一つには広く深い人民の政治的動員をもちとることであり、二つにはそこにおいて人民大衆みずからが政治経験をふかめ、又それをつうじ革命的積極性を培養することであり、三つには鮮明な政治目的のもとで闘い抜くことであり、四つにはしかもあくまでも組織として闘い勝利することである。それが戦術決定の規範である。

つまり誰か一人が火炎ビンを投げるのが大切なのではなく、人民大衆が打って一丸となり共通の政治目的のもとで、海洋博の開催を阻止し、皇太子訪沖を阻止しぬくために、みずからその戦闘に組織し、政治的に動員しつつ闘い抜くことが大切なのである。

そこでの闘いの質が左翼的で革命的であるか否かこそ問題であり、六郷土手の大半がハナクソをほじくりながらボケっとしており、ひめゆりの塔で一人火炎ビンが投げられても無意味なのである。

西田右翼漂流路線の右翼的限界、左翼ボーズ主義の日和見主義、代行主義こそこれをもたらしめているのであり、なんらわが同盟の戦闘の歴史を主体化していないことの証左なのである。

第二には理論であれ、闘い方であれ、党活動であれ、そこにならばパターンがなく革命的な軸を有しておらず、盗用、ひょう窃、サル真似のくり返しに終始しているということである。

手近なところでは沖縄解放闘争にかんする最近の彼等のひどい理論的混乱、のりうつりを見てみよ。

七二年沖縄返還粉砕闘争をその最先頭でたかかった戦旗派（を勝手に名乗っている西田

右翼漂流一派）であるにもかかわらず、彼等は天皇制ポナバルチズムにつづき、今度は沖縄奪還をとええ、返還粉砕派から奪還派へといつの間にか一八〇度の転換をとげているのである。

ニセ『戦旗』三五〇号の本土復帰闘争の支持共闘、沖縄を安保粉砕日帝打倒の決定的水路とせよ論をみてみよ。

中核派奪還論は「それ自体正しい立場に立ちながら」「日本民族主義との対決をいまいにしている」だつて、

一体こうした理論問題における恥かしげもないひょう窃、そしてのりうつりは誰がもたらしているものなのか。

無原則の西田サル真似男は、政治技術としてこういふことをやるのが、すぐれた革命家だと考えているのである。

つまり池宮城グループとの結合の深化のために、或る時はこういい、又沖共闘での解放派への茶坊主的役割りにあつては青婦協路線をいい、純プロ主義を全面開花させ、狭山闘争の過程にあつては今度は純プロ主義批判をやらかすという具合に、戦略問題における何の規範も、理論問題における何の原則性も、何一つ持ちあわせていないのが革命的だと考えているのである。

その過程は政治組織的に全く無総括であり、総括と称しては「あいつが悪かった」「こいつのせいだ」等と言うだけであり、全然全く革命的左翼としての政治的、思想的基軸を失ってしまったのである。

第三には従つてこのことは党建設における見せかけだけの、うわべだけよそおつた映画のセットみたいな見てくれ主義によつて一層鮮明になっている。

例えば機関紙問題にしてからがそうである。わが同盟がブランケット版四面構成の機関紙発行を停止し、三四七号（特別号）以来B4版のページたて機関紙を発行しているのは明確な根拠がある。

それはつまり自力更生の精神をもって、わが同盟みずから印刷屋への外注をつうじ新聞発行をなす体制をあらため、印刷所そのものをその全施設と共に同盟建設の一貫として建設し、自力による新聞発行体制をつくりだすためである。

その過渡における同盟の現在のな力の弱さの否定的反映として、ブランケット版新聞は発行しえず、ためにやむなく三四七号以来B4版のページたて体制をとっているのである。

しかしながらわれわれは、たとえガリ版ずりであっても外注するよりは自力更生することが大切であると考へており、又一連の印刷所建設の闘いの過程をつうじ、徐々にではあ

るが施設も拡大し、この作業に従事しうる印刷技術修得者も増大しつつある。

しかるに足立グループ西田右翼漂流路線のもとでは、一体何のためにそれまでのプランケット版ニセ『戦旗』をやめ、B4版ページたてにしたのであろうか。

しかもニセ『戦旗』三五一号にあっては、次号から再びプランケット版にするなどと言っている。

足立グループが半截以上の能力を持つハイデルやゲイバーを購入したという話は全く聞かないから、ここに至ってわれわれとの協定を破り発刊したプランケットのニセ『戦旗』三四〇〜三四四、B4版のニセ『戦旗』三四五〜三五一号のあいだには、約一年半の過程があるにもかかわらず、党建設における何の実体的前進もないということがはっきりするのである。

党活動の維持そのものが全くその日暮しであり、いつも見せかけだけのポーズで済ますが、西田の右翼日和見主義の本質なのである。

つまりそこにあつたのもサル真似であり、中核派がB4版でだしてたからマネしちゃうという以外の、何の理由もなかったのである。

われわれ戦旗派は五年に至らんとする戦旗派建設の一切の歴史を内在的に把握し、あらゆる失敗、誤ちをも主体的に克服するために苦闘しつつ、独自の党建設と革命戦争の思想と理論を構築し、ゆっくりとしかしたゆまず前進する覚悟である。

従って足立グループとの闘いも、われわれ自身が未だ孕む内なる小ブルジョア性との対決としてとらえかえし、整風運動をつうじつつ、まずもって戦旗派そのものの革命的主体性をつくりだし、しかし必ずやその貫徹をつうじつつ足立グループを解体、せんめつするという路線のもとに闘いつづけている。

だがはるかそれ以前の問題として、この沖縄海洋博決戦の過程をつうじあばき出された西田の総破産は急ピッチであり、分解自滅も時間の問題となってきたのである。

これまでの全主張から考えて、この海洋博

闘争の過程をつうじつくりだされた矛盾は絶対的なものであり、西田漂流路線のもとではこれを止揚することはできない。

まさにひめゆりの塔の墓穴は、足立グループそのものの墓穴であり、そこで破裂したのは矛盾であり、あばき出されたものは西田右翼漂流路線のはかなさと本質的な「カッコーをつける」主義である。

われわれ戦旗派は、全党全軍の団結のもと更に更に総力をあげて激闘の三カ月を徹底して闘い抜き、安保一日「韓」体制打倒にむけ猛烈なる連続的決起を克ちとっていかねばならない。

全党、全軍の同志諸君！

自力更生の精神を更につちかい、刻苦奮闘しつつ、天皇訪米絶対阻止戦の大爆発へ！

足立グループを絶対に解体すべく、みずからを整風し、真に革命的な人民思想で武装し、前進につぐ前進をかちとろう。

西田の右翼漂流路線を粉碎し、戦旗派を真のボルシェヴィズムで武装せよ。

### 激闘の三カ月への突入を宣言

## 七・一七へ向け関西で集会

全国の労働者、学生の皆さん！

七月十三日、大阪府立労働会館で「海洋博粉碎、皇太子訪沖阻止」の一大決起集会が開かれました。

これは関西労共闘と朝鮮問題研究会が、一カ月に及んで日曜毎に開かれた「沖縄人民連帯学習会」と、二度の大阪駅前でのピラマキの成果としてかちとられたものです。

よるなアジア侵略反革命に向け沖縄人民をその尖兵と化すための政治的策謀であり、われわれは沖縄人民に対する血債にかけこれを阻止しなければならぬとの提起が

## 五・一三戦闘の意義あきらめか

### 弁護側証人が証言

全国の同志諸君！

七月 四日東京地裁において五・一三公判闘争六グループが断固闘い抜かれた。

当日は平安名証人による沖縄の現実がリアルに証言され、とりわけ平安名証人が基地労働者として働いていた牧港兵站部においては常にベトナムの戦場の硝煙と血痕

に直結していたことが証言され、沖縄がアジアへ向けた反革命前線基地であることが暴露されていった。

あるいは証人の住んでいたところでは常に基地公害と軍用機の墜落の危険にさらされており、全島が軍事基地として存在していることが証言されていた。

更には七二年「返還」以降そういった沖縄の現実は支配階級の宣伝とは裏はらに増々基地の強化と合理化、それに伴う全軍労働者に対する様々な攻撃の激化が強まっていること、それに加え日本軍自衛隊が派兵され、増々全島軍事基地化攻撃、日米共同反革命前線基地としての打ち固めがなされていることが暴露されていった。

前回の石黒証人による暴露に基づき増々鮮明に、われわれが返還粉砕ノを高くとかかげ沖縄人民との連帯を目指して闘い抜いたことの正当性、意義が明らかにされていった。

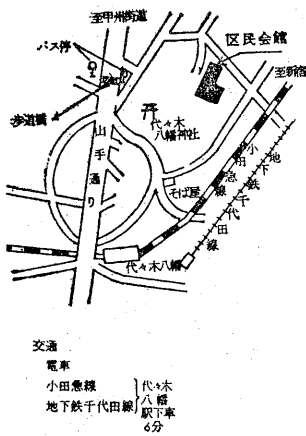
全国の同志諸君！

インドシナ人民の革命戦争の勝利以降、絶望的な反革命攻勢にうって出、何としても自からの延命をなさんとする帝国主義者共に対する全面的な対決を、五・一三戦闘の革命的な意義を継承し、戦争的死闘として激闘の三カ月を闘い抜け！

# 戦旗派政治集会

## ■基調報告 日向翔

日時 八月十日午後六時  
場所 代々木八幡区民会館  
(小田急線代々木八幡駅下車)



# 日帝の朝鮮出兵策動粉碎！

## 海洋博決戦の意義うちかため 8・2(三木訪米)阻止 8・10(三木訪米)へ猛進せよ！

全国の同志諸君！労働者人民諸君！  
インドシナ人民の民族解放革命戦争の大勝利と腐敗の極地に達したアメリカ帝国主義の敗北は、今や現代過渡期世界の階級激闘を更に激烈なものへとおし上げていく。

階級激闘のつぼは、今や朝鮮を巡る危機に集中的に表現されている。韓国民衆の決起が内乱的に発展し、他方朴の先駆者チャーが打倒されるや朴反革命カライは、臨戦体制に突入した。韓国は実質上の内戦に突入したのである。日帝は朝鮮出兵へ向けた沖繩の侵略反革命前線基地化攻撃―沖繩海洋博、皇太子訪沖を突破口に、戦後新植民地主義的支配を不可欠の一環とする、崩壊の危機にのたうつ戦後帝国主義体制の護持へ向け、米帝と共に朝鮮侵略反革命戦争体制への急速なる移行を策謀してきた。それがまさしく八・二、三木訪米と日米反革命宗主会談にほかならない。

かかる事態は今や日本労働者人民に重大なる歴史的選択、戦争と革命の選択をせまっているといつて過言ではない。金芝河をはじめとした韓国民衆の血叫びをきけ！日帝によるアジア人民殺りくの歴史を想起せよ！  
今こそ全党・全人民は七・一七―一九闘争の武装進撃の成果の上に、アジア人民への血債にかけ、うって一丸となって日帝の侵略反革命戦争策動との一大武装的階級攻防を蜂起！内戦・世界革命戦争の勝利に向け、闘い続けなければならない。

### 七・一七、一九皇太子 訪沖阻止―海洋博粉碎 に怒りの大爆発

昨年フォード来日における十六万敵戒体制を上まわる弾圧をはねのけ、七・一七―一九連続闘争は沖繩人民の革命的決起に連帯して、機動隊の厚い壁を打ち破って闘い抜かれた。日帝国家権力は、正当なる沖繩人民の皇太子上陸、海洋博開催に対する怒りの決起に恐怖し、沖繩へ二四〇〇もの機動隊を送り込み、沖繩人民には徹底的マンツーマン尾行を、又「精神障害者」には保安処分・隔離を強要し、何とか怒りをおさえ込まんとした。しかしコザ暴動を始めとした戦闘的闘いの歴史を有する沖繩人民は、ひるまずこれを打ち破り自衛隊軍楽隊の海洋博参加粉砕を突破口に、戦闘的に決起した。「本土」においても、沖繩人民への血債を自覚し、日帝の朝鮮出兵へ向けた海洋博を、そしてこれへ沖繩人民を反革命統合せんとする皇太子訪沖を絶対許さぬと決意した、わが戦旗派四〇〇をはじめとした数

千の戦闘的労働者・学生が、沖解同と共に、機動隊・装甲車・放水車を総動員して空前の敵戒体制―破防法弾圧体制をしく国家権力の壁をズタズタに切り裂いて闘い抜いたのである。

羽田現地へ決起した数千の労働者・学生は、朝鮮侵略反革命戦争へ向けた沖繩の前線基地に対する日本労働者階級人民の返答である。七・一七―一九大闘争の第一の意義は、まさしく日帝の危機を暴露してあまりある未曾有の弾圧体制―破防法体制を打ち破り、沖繩人民の血叫びに答え沖繩人民とのかたい団結の下に闘い抜いたことにある。

そして第二の意義は、日帝が朝鮮危機（日帝の体制的危機）をめぐって朝鮮出兵へ向けた全島軍事基地化攻撃―海洋博開催を突破口に七・二三宮沢訪韓（外相会議）、八・二三三木訪米（三木一フォード会談）、八・二八シュレジンジャー来日（坂田―シュレジンジャー会談）、九月日「韓」関係会議、九月天皇訪米、坂田訪米、キッシンジャー来日と、やつぎばやの軍事外交政策として、安保の朝鮮侵略反革命戦争体制への再編、日「韓」体制の戦争遂行体制への再編をなさんとしていることに対し、安保・日「韓」体制打倒・天皇訪米絶対阻止、激動の三カ月の日本労働者階級人民の側からする突破口を切り開いたことにある。

目をよく見開いて見よ！開会式での三木発言を。「海洋の利用とその資源の開発が必要不可欠」とは、朝鮮出兵へ向けた沖繩の全島軍事基地化・海底軍事基地開発であり、釣魚台にいたる海底資源略奪こそ海洋博のねらいである。皇太子の談話を見よ！「幾多の悲惨な犠牲を払い、今日に至ったことは忘れることのできない大きな不幸」などと「幾多の犠牲」が実は天皇を頂点とする日帝ブルジョア共の強盗戦争による沖繩人民の犠牲であることを隠すべく、沖繩人民の牙を「やさしお言葉」で抜きとり、反革命統合せんとするたくらみを。「ソテツ地獄」とよばれた日帝の戦前の苛酷なる植民地主義的支配、第二大戦の沖繩決戦における日本軍による百万沖繩人民のうちその三分の一を天皇の名の下に虐殺してきたこと、戦後米軍政の抑圧の下に沖繩人民をおとし込めてきたこと、そして返還後三年、基地は縮小されるどころか拡大し、米軍人自衛隊の犯罪は減らず、物価は高騰し生活のかたて海をうばわれ、職をうばわれ、沖繩をたたき出されつつあることこそ、沖繩人民の怒りの根源である。かかる正当なる怒りの牙を抜きとらんとする攻撃こそ、日帝の下に沖繩人民をじゅうりんしてきた日本人の血債にかけて許すべからざるものなのだ。

そして第三の意義は、アジア人民への血債をかけた闘いとして戦闘的に打ち抜いたということである。金芝河アピールは「特にあなた方は、私達が必死に反対するものを必死に支援しようとし、私達が必死で守ろうとするものを必死にじゅうりんしようとしている」と日本労働者人民を告発している。朝鮮出兵に向けた沖繩の全島軍事基地化こそ韓国民衆・アジア人民が必死で反対するものではなからうか。そして更に海洋博においては、開催当日から一ヶ月にわたる「世界海洋青少年大会」（右翼笹川良一が委員長）を行い、これに朴は勝共連合を通して数百人の韓国青少年を送り込むとか、朴政権による摩文仁ヶ丘への韓国人戦没者慰霊塔建立が行われるとか、海洋開発とかいって釣魚台へ至る大陸架を略奪をたくらむとか、皇族・皇太子訪沖を通して沖繩人民を再度侵略反革命の尖兵に仕立て上げんとする諸々の策動がこらされているのである。

第二次大戦では皇族・天皇を頂点とする日帝軍隊がアジア人民をじゅうりんしてきた。日本労働者人民は、まさしくアジア人民に血債をおついている。今また海洋博攻撃を許してあやまちをくり返すのか、断じて否である。まさしく七・一七―一九闘争は、日本人民の血債にかけた闘いとしてかちとられたのである。その第四は、五・一五侵略反革命体制粉碎という沖繩解放闘争の歴史的命題を、海洋博が五・一五体制を集中的に表現しているが故に、再度大きく沖繩人民・「本土」人民の前に投げかけたということである。七二年施政権返還によって沖繩人民は一切解放されなかつた。①米軍犯罪も減らない。海兵隊員による女子中学生暴行事件に山崎アメリカ局長は「人間社会で犯罪がおこるのは当りまえ」と開き直り、伊江島米軍人発砲事件被告を日帝は不起訴にしたりしているのである。この事態は沖繩人民が米軍政によって苦しめられてきた現実を何ら変更するものではないことを示してあまりある。②米軍基地の縮小は名ばかりであり、実際上強化拡充されている。又自衛隊がどんどん上陸し、基地が建設されて更に土地を奪われている。この事態は、基地の中の沖繩、沖繩人民が基地によって苦しめられてきた現実を何ら変更しないばかりか、増々ひどくなるばかりであることを示してあまりある。③返還後「本土」資本が乗り込み沖繩の零細企業の倒産が続出し、生活の糧である海がよごされ、かといって、投下された資本がCIT等を見ればわかるように労働力需要を拡大させず、失業は増加するばかりである。こうして沖繩人民は沖繩からたたき出されつつある。④沖繩人民は「本土」におい

て、言語・習慣の差異から沖繩差別を受けてきたが、かかる事態は一向解決されず、沖繩からたたき出されて来た沖繩人民が増加しつつある現在、更に矛盾は大規模となっていると云ってよ。

この様に五・一五侵略反革命体制によって沖繩人民は、更に矛盾のしわ寄せを受けている。故に沖繩人民の怒りは更に深まっており巨大な爆発点に達しつつあるといつて過言ではない。一七一九闘争は五・一五侵略反革命体制爆発に向けた最も根底的なところからの決起、武装決起へと発展する突破口を切り開いたのである。返還粉砕の闘いは、こうして今や海洋博粉砕闘争の武装決起を通して、五・一五体制粉砕・沖繩解放・安保・日「韓」体制打倒、日帝打倒・プロ独樹立へ向けた橋頭堡をきざしたのである。

その第五は社共人民戦線派の排外主義者ぶりを増々鮮明としたことにある。七二年沖繩施政権返還によって沖繩闘争は終わったと彼等は宣言した。そして海洋博を巡っては、全く日帝の攻撃を見抜けず、むしろ推進役になり、「国家軍事に軍楽隊が出るのはあたりまえ」などと沖繩人民の敵、日本軍自衛隊の海洋博参加攻撃を是認し、はたまた「何故天皇を訪沖させないのか」とブルジョア共がほくそえむような後おしをし、沖繩人民、そしてアジア人民に敵対する排外主義者ぶりをひれかししている。沖繩人民は、返還派の沖繩闘争放棄と敵対にもかかわらず不屈に決起しつつある。七二年返還が何も解決せず、むしろ矛盾を深めているからである。海洋博を巡る闘いこそ、最もこの社共人民戦線派の腐敗をさらけ出させたのである。

われわれは、かかる一七一九闘争の意義を確認すると同時にこの闘いを突破口に、矛盾を深め増々凶暴化を深めている日帝の侵略反革命政策一軍事外交路線、安保・日「韓」体制の朝鮮侵略反革命戦争体制としての再編策謀と、朝鮮人民一アジア人民への血債にかけて対決し粉砕し、日本階級闘争の労働者人民の勝利へ、更に武装進撃しなければならぬ。激闘の三ヶ月を、安保・日「韓」体制打倒、侵略反革命戦争爆砕を断々固とした武装進撃によってからとれ！

### 朝鮮への共同出兵をねらう 反革命「宗主」会談三木 訪米を実力阻止せよ！

ヴェトナム・カンボジアにおける米帝と、チーノ、ロン・ノル反革命カイライ政権の敗退と、インドシナ人民の民族解放革命戦争の勝利は戦後帝国主義の新植民地主義的支配を食い破り、崩壊の極に至らしめた。この被抑圧民族人民の嵐のごとき民族解放革命戦争の進撃は、第三世界人民に対する新植民地主義を不可欠とする戦後世界を規定してきたヤルタ体制の現実、米ソ平和共存体制をも食い破り、まさしく戦後帝国主義の崩壊的危機をもたらしているわけである。帝国主義の腐敗と没落、民族解放革命戦争を軸とした革命の成熟と革命の勝利の時代、これがまさしく現在の国際階級闘争の現実認識である。

この国際階級闘争、世界史の現実認識こそその未来、世界革命戦争一世界プロレタリア独裁の現実性の確信をわれわれに与えてやまない。現代過渡期世界こそ、世界プロレタリア

ア独裁一世界共産主義への歴史的過渡期であるという確信にうらづけられた全党全人民の武装進撃が、ヴェトナム人民の勝利からくみとらねばならない核心である。

ヴェトナム人民の民族解放革命戦争の勝利は、限りなく被抑圧民族人民を鼓舞し、人民の自己解放の気運を封じ込めんとする米ソ支配者のおもむくをはるかに越え、おしとどめることのできない勢いをもって全アジアに拡大しつつある。と共に崩壊的危機に迫りつめられた帝国主義者・カイライ共は、一層身をよせあい、密集した反革命をもつて、帝国主義的延命をはからんとしていることも見のがしてはならない。革命の前進が対極に巨大な反革命を生み出すものであるということは、歴史の示すところである。侵略反革命戦争をおし進めること以外に現在の危機を乗り切ることのできない、帝国主義者共の絶望的なあがきと、勝利の確信に満ちた民族解放革命戦争の一層の壮大なる激突の時代がおとづれていく。

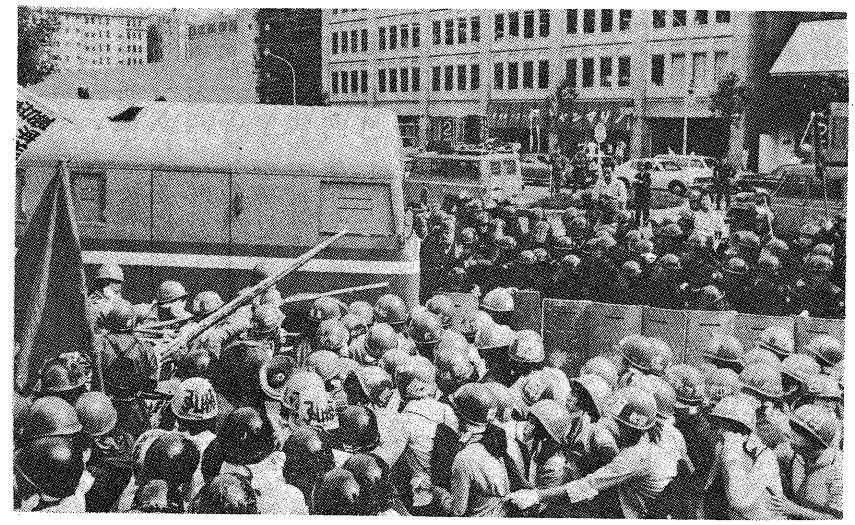
その最大の焦点は朝鮮危機にある。米日帝国主義の侵略反革命戦争遂行と、民族解放・祖国統一の革命戦争との激突が現実の問題と化しているのだ。

南北分断の上に、言語を絶する反革命支配によってしか支配しつづけることができない朴反革命カイライは、ヴェトナムが勝利をかちとった今、戦争体制によってしか、韓国民衆支配をなし得ないほどに危機を深めている。朝鮮危機の歴史的爆発は今や不可避となっており、米日両帝国主義の侵略反革命戦争準備はいよいよ急ピッチに進められんとしている。八・二、三木訪米、八・二八ジュネジンジャー訪韓・来日、九・三〇天皇訪米、キッシンジャー来日、坂田訪米とつづくすさまじい攻撃は、日米両帝国主義の、朝鮮内乱に対する瀬戸際の危機感を文字通りあきらかにしている。

六月十六日キッシンジャー米國務長官は「韓」国の崩壊は日本に悲惨な衝撃を与えよう」と韓国が日帝の新植民地主義的支配の下に組み込まれ、日「韓」が一体化していることを明らかにし、十八日には「日本とアジアにとって死活的に重要な朝鮮半島の平和と安全を維持する決意だ」と、戦後帝国主義世界体制の崩壊的危機の現実の中で、日帝の存亡と、日帝の朝鮮支配の成否が決定的な役割を果すことを明らかにした。二十一日ジュネジンジャー米国防長官は「北の侵略に対しては核使用を辞さぬ」と表明し、フォード米大統領も核の先行的使用を強調した。米帝はまさしく日帝の存亡と不可欠の關係にある「韓」国の「安全」を問題にしているわけである。「韓国とは一衣帯水」であるという日帝はこの間、朝鮮危機に恐怖し、六月日「韓」軍事担当者会議による朝鮮軍事情勢分析、七・一五、一六アジア・太平洋大使会議による日帝官僚共の意志統一、七・一七皇太子訪沖・海洋博開催による朝鮮出兵へ向けた沖繩全島軍事基地化攻撃、七・二三官沢訪韓・外相会議を通じた日「韓」戦争遂行体制の下準備をなして来た。

とりわけ官沢訪韓を巡っては、日帝は米帝をも動員し、朴に官沢訪韓の条件として、「金東雲事件」の「国権侵害」をフル活用し、二つの「口上書」を提出させ、日帝が韓国の「宗主」たることを認めさせ、屈服の上に日「韓」戦争遂行体制へ向けた「日韓閣僚会議

(七・一九)  
敵権力と対決する戦闘的労学



の早期開催」と三木一フォード会談の下準備が目論まれたのである。日「韓」閣僚会議においては①政府ベースの軍事・経済援助の再度の具体化(七月に入って日帝は、二三四億円の借款供与を決定したばかりなのだが)②韓国重化学工業化計画への輸銀の商業ベースの借款の具体化③日「韓」大陸ダナ協定の批准が追求されることが明らかとなった。

かかる方向で官沢外相の訪韓があったが故に「画期的なこと」(金外相)という評価が日「韓」支配者共によって下されているのである。こうして準備され策謀された八・二、三木訪米と三木一フォード会談こそ、朝鮮への共同出兵へ向けた反革命「宗主」の頂上会談であり最高レベルの反革命政治謀議である。その内容とは、①朝鮮侵略反革命戦争に、日帝が一方の主役として登上せんが為に日米侵略反革命戦争共同作戦(日米防衛協力)②日米帝国主義軍隊の朝鮮出兵軍事分団を「防衛分団」の美名の下にとり決め、③戦争遂行上、米帝核使用の日帝による全面支持を確認し、④在日米軍のかかる方向へ向けた機能的再編と出撃体制の合意をなし、⑤かかる日米共同作戦遂行の為に年二回の日米軍事担当者の実務者会議の設定の合意をなすというおそろべきものである。

かかる「宗主」会談の上に日米帝の軍事実務処理が八・二八ジュネジンジャー来日坂田ジュネジンジャー会談、十月坂田訪米によって策動され、この下に九月上旬日韓閣僚会議を通して、日「韓」反革命戦争遂行体制を確立し、この方向の下に三木訪中をもって中国をかいじゅうし、九・三〇天皇訪米をもって、かかる体制の国民的合意⑥「挙国一致」をたくらんでいること、これがめぐるしく策動されている日帝の軍事外交路線侵略反革命攻撃のあらましである。この攻勢こそ安保体制の朝鮮侵略反革命戦争体制への再編攻撃であり、日「韓」

体制の戦争遂行体制への再編攻撃である。かかる日米帝国主義の安保・日「韓」体制強化の攻撃にささえられて始めて、米ラード前国務省韓国部長が「朴政権が北の脅威を言うのは、国内統制のたずなを締めるため」といっているような、朴反革命カライによる韓国民衆の血叫びを封じ込めんとする臨戦体制への急ピッチの移行が可能となっている。

七月八日大統領布令緊急措置第九号に基づいた防衛四法を、朴は深夜国会で強行採決した。国民防衛基本法は、十七才から五〇才の男子に国土防衛隊への参加を義務づけ、成人男子の政治活動を全面的に禁止し、社会安全法は、出所後の思想犯の保護監察の強化と住所制限、「再犯の恐れのある者には監護処分」し、予防拘禁・保安処分を合法化した。防衛税法は、新たに年間二十億ウォンをとりたて韓国民衆の生活苦を更に倍増させ、教育公務員関係法は、私大の教授を含めた教官に対し、文教当局に任免権を与えるものであり、どれをとってもおそろべき内容を有する暗黒法である。

しかしかかる未曾有の弾圧体制戦争体制の下で苦しめられている韓国民衆は単なる奴隷ではあり得ない。反日独立決起・李打倒の革命的歴史を有する人民である。韓国民衆の自己解放への決起は不可避であり、韓国民衆対反革命朴カライの内戦、日帝の侵略反革命戦争は不可避である。かかる侵略反革命戦争策動の当面の最も重大なる焦点こそ八・二、三木訪米に他ならないのである。

朝鮮侵略反革命戦争の現実性が、日帝にとりその存立をかけたものであることを示すと共に、日本労働者階級人民にとっても巨大なる歴史的試練を果していることを示している。

日帝はこの間日本労働者階級人民に対し朝鮮の危機をあまり、民社をもまき込んで日韓議員連盟を結成し、あるいは社会党を公選法改悪等国内政策でまき込み、労働者人民を排外主義的に動員せんとたくらんでいる。又「憲法上の制約」を強調しくり返ししながら、「憲法改悪」↓自衛隊の日本軍としての国民的合意をも野望しているのである。かかる攻撃に対する社・共の対決といえ、日帝の侵略反革命の攻撃を全面的に暴露し、対決するのではなく、「平和憲法」の護持の観点からのみ、弱々しく国会で質問するのみであり、全く無力さを露呈しているのが現実である。生活の上では小ブル的理念ではなく現実がものをいうことに全く無自覚なのである。日帝

は過去中国侵略戦争への突入の際「芦溝橋事件」をデッチ上げ、「中国からの宣戦布告」なるものを人民につけ、挙国一致↓侵略戦争をたくらんだ。ヴェトナム戦争においても米帝は「トンキン湾事件」をデッチ上げ、国民的合意をつりつけて介入していったではないか。

情勢のすさまじい進展の中で、たしかに労働者人民の危機感はずいぶん深まっている。七五春闘の敗北は、労働者階級人民に大きなイラ立ちを与え、既成指導部に対する不信をかきたて、アナルコ・サンディカリズムへ労働者をかりたてている。

他方で人民は、戦闘的でありつつも革命への展望を喪失したテロリズムの陥穽へおちこんでいる。人民の危機感がかかる自然成長性にゆだねられるかぎり、日帝の侵略反革命戦争の下へと日本労働者階級人民は排外主義的に収約される以外はない。

そしてかかる屈辱は、日本労働者階級を再び三たび朝鮮人民、アジア人民を「奪いつくし、焼きつくし、殺しつくす」あやまちを繰り返すことを意味しているのだから、「だれもがそうするのだからしかたがない」と言ってしまうはしないのである。

「抑圧する民族は自由でありえない」という真理こそ胸にきざみ込まねばならないし、とりわけ、アジア人民に多大なる血債を有する日本労働者人民は、この日米帝の朝鮮侵略反革命策動に対して猛然と対決せねばならないのである。

「平和憲法」護持の、生活から遊離した弱弱い反対ではなく、無力なる反戦平和ではなく、猛然と闘って侵略反革命戦争を打ち破り、労働者階級人民が日本帝国主義を打倒することが問われているのである。勝利の展望とは、朝鮮侵略反革命を内乱に転化するためには、日帝打倒の蜂起を系統的に組織するために闘うことであり、この下に大衆の自然発生的決起を導びき糾合していくことである。ほんの一部のブルジョアを打倒する人民戦争↓革命戦争をおそれるならば、ほんの一に



皇太子訪米阻止！筑波共闘を先頭に羽田へ（7・17）

ぎりのブルジョアジーの延命のための侵略反革命戦争を許し、かつその尖兵となること以外に道はないのである。この重々しい間にこそ日本労働者階級人民は答え、実践的回答を与えてゆかねばならない。

われわれは、日帝が朝鮮侵略反革命戦争の前夜にあるという現実におしつぶされてはならないし、焦燥に陥ってすてばちになってもならない。又、この認識を単なる宣伝材料、あるいは危機アジリにとどめてはならないのである。

全ての労働者、人民諸君！朝鮮侵略反革命戦争への道をはき清める三木訪米を、アジアとりわけ朝鮮人民への血債にかけ粉砕せよ！八・二羽田へ進撃し、戦争準備内閣三木の野望を人民の力で打ち砕け！

八・一〇戦旗派政治集会へ  
総結集せよ！

全国の同志友人諸君！  
インドシナ人民の勝利と、朝鮮危機を巡って帝国主義の体制的危機は深まるばかりであり、米・日帝の絶望的な朝鮮侵略反革命策動の下で、日本労働者階級人民は、重大なる歴史的選択を強いられている。

日本労働者階級人民の自己解放は、朝鮮侵略反革命（戦争）を蜂起し内戦・世界革命戦争に勝利する以外にない。そして、この闘いを系統的に組織し、堅忍不拔の前衛党を建設することなくして、かかる歴史的大業はなしえないのも歴史が示すところである。

社・共人民戦線派は、日帝の軍事外交路線に「平和憲法」護持と弱々しく反発するのみ

過渡期世界の革命

第三次ブントへの軌跡

日向 翔 著

戦旗社

定価二二〇〇円 送料一一〇円

で、実質的に日帝の侵略反革命に屈服している。朝鮮出兵に向けた沖繩の全島軍事基地化攻撃を看破せず、海洋博にモロ手をあげて賛成し、沖繩人民の反革命統一皇太子訪沖を看破せず、「天皇を何故訪沖させないのか」と日帝を「左」からささえている。

日帝が韓国を新植民地主義的に支配しているという現実の中で、「金大中事件」において、国権侵害をとらえ田中の「弱腰外交」をせめた排外主義者ぶりが記憶に新しい。かかる人民戦線派がどうして労働者人民の前衛でありえようか。

純プロ主義カクマルも同断である。狭山闘争に敵対し、実質上、日帝の侵略反革命に向けた国内人民の差別人民分断攻撃に加担し、ヴェトナム人民の民族解放革命戦争の勝利にツバをはきかけ、日帝は危機を財政政策で解消するなる平和主義的帝国主義の幻想Ⅱ大内国独資論に依拠して現下の日帝の侵略反革命戦争準備に目をつぶり、帝とスタの「相互依存・相互反発」核戦争の危機を反戦平和主義的に叫ぶばかりである。

わが同盟戦旗派は、昨年七・七政治集会の中で、七〇年七・七華青闘告発を、第三次プロ戦旗派建設四年間の闘いの切開を通して受けとめ、血債の思想、猛省精神をつかみとり、狭山九月決戦・フォード来日阻止闘争を死力を尽して闘い抜き、金芝河アピールに応え安保・日「韓」体制打倒へ向け着実な前進を実現してきた。

組織された暴力と国際主義のポリシエビキ魂を継承し、純プロ主義を克服し、アジア人民への血債・猛省精神で武装し、党・革命勢力として闘い抜くという立脚点を獲得したわが同盟は、六〇年安保闘争を先頭で闘い抜いた安保プロト、十・八羽田闘争から七〇年安保を先頭で闘い抜いた第二次プロトの革命性を唯一継承発展させ、革命的再生を克ち取りつつあることを誇りをもって明らかにすることができ。

不拔の第三次プロトの建設の勝利を全党・全軍・全人民の一丸となった突撃で克ち取るうではないか。

それとともに七五階級攻防の一大決戦、天皇訪米を巡る闘いが、日本労働者階級人民の

前にたちはだかっていることも見のがしてはならない。八・一〇政治集会をアジア人民への血債にかけ、天皇訪米絶対阻止の戦闘宣言の場と化すこと、これが又八・一〇政治集会が実現すべき他方の重大な任務である。全ての労働者人民諸君、八・一〇戦旗派大政治集会に結集し、党・革命勢力へ自らを組織し、全党・全軍・全人民の武装せる力を日帝に対し誇示せよ。

八・一〇政治集会をアジア人民への血債にかけ天皇訪米絶対阻止の場と化し、安保・日「韓」体制打倒の激闘の三カ月を勝利へ向け進撃せよ。

(十二頁よりつづく)

「スターリニスト圧制による新たな苦難におかれるベトナム人民」だって、カクマルの言う「人民」とは植民地的収奪と闘う、農民や労働者ではなく、どうやら地主や高利貸・軍人・労組御用幹部等、チュー体制受益者のことらしい。まさに人民の敵Ⅱカクマルの本領発揮である。

破防法弾圧を恐れて敵権力に命乞いする卑怯者はさっさとそりするがよい。

われわれはこの一年の闘いによって更に人民のために闘いぬく思想を固めた。あふれ出る熱情は敵せん滅にむけて爆発しつつある。

わが闘いの成果の一切にかけ、戦闘的伝統を継承発展させ、一大飛躍をかちとろう。

十・八、五・一三をうけつぎ、人民の巨大な進撃への血路をわが手で切り開こう。

八・一〇戦旗派政治集会の圧倒的成功を足場に、天皇訪米絶対阻止、安保・日「韓」体制打倒へつき進もう。

「戦旗」販売書店

(関東)

△東京▽

- 郁文堂 文京区本郷六―一七―一〇 電話八―一―二八〇二
- ウニタ書舗 千代田区神田神保町一―五三 電話二九―一―五五三三
- かんたんむ 杉並区高円寺四―四―一四 電話三二―五―三〇八九
- 苦悩舎 渋谷区恵比寿西二―八―一六安田ビル 電話四六―一―六三五四
- 幻遊社 世田谷区北沢二―一―三―一五 電話四一―三―九六〇九
- コマバ書店 目黒区駒場二―四―一五 電話四六―七―九八七三
- 高野書店 豊島区池袋二―一―一三 電話九七―一―〇八四九
- 文献堂 新宿区戸塚一―四八〇 電話二〇―三―二九七六
- 文鳥堂 新宿区四谷一―四野原ビル 電話三五―三―二六〇三
- 明大生協 千代田区神田駿河台一―一 電話二九―三―二二〇一
- 模索舎 新宿区新宿二―四―一九 電話三五―二―三六六八
- 雄文堂 品川区上大崎二―二七―一七 電話四九―一―六七二二

吉祥寺ウニタ

- 武蔵野市吉祥寺本町二―二〇―一七 電話〇四―二―二―二一九六一八
- アヴァン書房 国分寺市南町二―一―八一三 国分寺マッシュン 電話〇四―二―三―二―三七二六〇

△神奈川▽

- ルビコン書房 横浜市神奈川区鶴屋町一―一八 電話〇四五―一―三―二―一〇六一〇
- 川崎ルビコン 川崎市川崎区東田町四―一―一九 電話〇四四―一―二―一―五七八四

△埼玉▽

- 上野台書店 上福岡市上福岡一―一―一五 電話〇四九―二―一―六―一―三二八五
- 盛文堂書店 狭山市入間川三―四―二〇 電話〇四二―九―一―五―二―二八一五



# 8・10戦旗派政治集会へ総決起し、 天皇訪米絶対阻止の戦闘的昂揚を かちとれ!

伊勢洋

全国の同志諸君！友人・兄弟たち！  
今こそ死力を尽した闘いが要請されている。  
幾世紀にも及んだ暗黒支配を、自らの団結  
した戦いによって葬り去ったベトナム人民の  
圧勝は、抑圧者・搾取者どもを恐怖のどん底  
に叩きこんだが、その絶望的な、しかし凶暴  
なまき返しを粉碎しない限り、全世界の労働  
者人民は一步たりとも進めないからだ。

苛酷な帝国主義の暴圧と闘い、屈辱の日々  
を耐えぬいてきた全世界の被抑圧民族・人民  
に、究極的勝利への確信を与えた、あのサイ  
ゴン解放の歓喜の日から三カ月が経過した。  
帝国主義の歴史の没落と、ふみにじられてき  
た人民の自己解放の趨勢は、敵味方を問わず  
誰の目にも鮮明に映じた。史上最強の帝国主  
義が、二度の大戦や数十年の世界制覇を通じ  
て培った政治的・軍事的威信の一切をかけ、  
千五百億ドル（四十五兆円）の戦費に加え、五  
万五千の戦死者、十五万の戦傷者を出しなが  
らも完敗したのだ。

当初、帝国主義者どもは茫然自失した。だ  
が彼らの階級的本能、更に全世界に網羅した  
利権・搾取・収奪の体制が、人民の追撃によ  
ってメタスタに絶たれることに恐怖し、力を  
奮ってまき返そうとはかっている。

マヤクス号事件等の挑発、カンボジア革命  
政権への許しがたいデマ・中傷、ベトナム禁  
輸・封じ込め、そしてベトナムに続かんとし  
て決起した韓国民衆に対するファッショ弾圧。  
朴の「緊急措置」連発の独裁下、ギマン的  
「国民投票」においてすら現れた過半の人民  
の意志は封殺され、東亜日報報道の自由は  
あるか、噂話まで取り締まられている韓国民  
衆は、更にその最良の息子たちが民青連事  
件によって逮捕・再逮捕され、金芝河氏は殺  
害されようとしている。「人民革命党事件」  
被告にいたっては、刑確定翌日密殺されたの  
だ。

朴を全面支援し、韓国進出企業数千社・数  
兆円の利権にかけ、進撃する被抑圧民族への  
憎悪ゆえに、残酷を見せしめ虐殺にすら拍手  
し、司令しているのが日米両帝国主義なのだ。  
日帝は朴の「功」に免じて金大中事件の犯  
人金東雲を追及しないことにし、日韓閣僚会  
議を再開し、独裁援助を強化しようとしてい  
る。日韓軍事会議にいたっては、すでに恒常  
化されているのだ。

米「韓」は共同軍事行動を強化し、共同演  
習をくり返している。米帝は朝鮮人民に対し  
「核先制使用」どう喝を国防長官シュレジン  
ジャーが表明し、この男やキンソンジャーが  
来日、そして天皇や三木の訪米を通じて、日

米の黒い血盟が強められ、日米アジアの人民  
に限りない犠牲を強いる策謀が周到に準備さ  
れようとしている。

この策謀の中心は日帝である。ベトナム解  
放の日、在日大使館を人民の手に収納せんと  
したベトナム留学生たちに暴行し、「ベトコ  
ンは許さない」等の暴言をはいた上、世界中  
でも唯一大量逮捕したことに象徴される日帝  
権力の凶暴性は日を追って激化している。  
朴ヘテコ入れし、日中条約を犠牲にしての  
日台航空協定では、台湾を国家として認めて  
反革命カイライを手なづけ、人民や中朝労  
働者国家にけしかけ、自らは「核防条約」廃  
案、原子力発電増設を機に、核武装へひた  
走っている。加えて「日米防衛分担」の日帝  
側よりする提起である。自ら侵略反革命戦争  
準備のイニシアをとり、米「韓」の要となる  
うというのだ。

第三世界からの収奪なしには、一刻たりと  
も延命しえぬ日帝は、その歴史的覚醒におび  
えきっている。日帝の対内外反動化は急速  
に開始されたのだ。これを闘いきり、アジア  
人民に伝えることこそが日本労働者階級人民  
の責務である。

今夏・今秋闘争はまさに決定的である。帝  
国主義の侵略反革命戦争を阻止しぬく闘いを  
構築しよう。日米「韓」の黒い血盟を打破し  
アジア人民と真紅の大合流をとげるべく、プ  
ロレタリア国際主義と組織された暴力の旗の  
下に闘おう。

天皇訪米こそがその分岐点である。日本の  
労働者人民は、アジア人民への血債にかけて  
これと死力を尽して闘おう。

戦旗派政治集会はこの闘いにむけた一大決  
起集会である。戦旗派政治集会の圧倒的成功  
は天皇訪米絶対阻止への第一条件である。そ  
して七〇年代中期階級攻防の頂点をなす安保  
一日「韓」体制打倒・侵略反革命戦争阻止へ  
の不可欠の前提である。

## 天皇訪米絶対阻止の決意を 打ち固めよう!

八・一〇戦旗派政治集会の任務は、第一に  
今秋天皇訪米絶対阻止の不退転の意志一致を  
固めることにある。

安保一日「韓」体制の再編強化を通じて、  
日本やアジア、なかんずく韓国民衆を圧殺せ  
んとする敵にとって元首の相互訪問は決定的  
であり、とりわけ日米両国人民を、この侵略  
反革命戦争へと欺瞞的に動員するためには欠

かすことのできない芝居の一幕をなしている  
のだ。

ベトナム敗戦を経て、危機に逆上している  
フォードら首脳・国際独占体を別とすれば、  
米国には孤立主義・第三世界への介入回避の  
動きが抬頭している。反戦闘争の蓄積が議会  
・労組等、世界支配を支えてきた連中にもそ  
れを反映させているのだ。

この動向は、第三世界の前進が即自己の消  
滅である米帝にとって最も根本的なのであり、  
それゆえに米帝は必死の世論工作を展開して  
いる。インドシナ解放勢力への誹謗中傷、朝  
鮮民主主義人民共和国への挑発攻撃や「南進  
近し」のデマによって国民を喚起しようとし  
るのだが、ベトナム侵略戦争が「トンキン湾  
事件」ゲッチ上げによって始まり、米帝自身  
の大敗北をもたらしたことを熟知する人民は  
容易にだまされはしない。逆に朴の人民弾圧  
を追及し、「韓」国援助停止が人民の要求で  
すらある。

また失業・インフレの元凶がベトナム戦争  
や軍費にあるという正しい認識も大勢を占め  
ている。

こうした事態は、世界に資本投下と新植民  
地主義支配を貫徹しているがゆえに、革命の  
前進を何よりも恐怖する国際独占体を動揺さ  
せているが、米帝以上に危機感を深めている  
のが日帝である。

日韓条約以来十年間に日帝は何兆円もの資  
本投下を韓国に行い、タイ・インドネシア・  
フィリピン・マレーシア等へも経済的政治的  
支配を強めており、この苛酷さへの人民の怒  
りが昨年の反日暴動として噴出した。

アジア人民の食糧・工業原料・石油・消費  
市場を収奪することによってのみ延命してい  
る日帝にとって、ベトナム革命戦争に続くア  
ジア解放の前進ほど恐ろしいものはない。そ  
して安保一日「韓」体制だけが頼みの綱であ  
る。

正義の決起を続ける韓国民衆を次々に虐殺  
し、内戦状態に入った中で、日米両帝国主義  
の朝鮮出兵によって圧殺しようというのだ。  
それゆえに日米両支配階級は共謀して天皇  
訪米を演出したのだ。

①第二次帝国主義大戦以来の反日感情を消  
滅させること、②元首・首脳・実務者等両国  
支配層の密着の効果などは目的の一部でしか  
ない。

③韓国やタイ・マレーシア等の人民の奮戦  
によって「大陸諸国」は諦め、日一比一豪等  
「群島防衛論」に走ったり、「モンロー主義」  
を主張しかかっている米国世論の一部に対し

て、フォード政府と日帝は一体となつて、「韓国防衛」朝鮮侵略反革命戦争を進めていくわけだが、日帝自体の不退転の「決意」を示し、米人民をこの反革命策謀に丸とさせ、企図にとつて、天皇の権威と「史上初の天皇訪米」の意味は絶大である。キッシンジャーは、天皇訪米を「われわれの計画に権威を与える」と言っている。つまり三木訪米によって決せられる「朝鮮出兵」策動を飾りたて人民の目をくらませようというのだ。

④ベトナム戦争とは異なり、朝鮮介入をする際、同盟軍として日帝が存在するというこのデモンストレーションによって米帝を鼓舞すること。これは日帝の側から「日米防衛分担」を要求する事態と相まって、ニクソンIIグナム・ドクトリン以来の「戦闘のアジア人化」策動にもマッチする。

⑤「韓国解放は日本革命へ続く」なる煽動と相まって「天皇の国、繁栄の日本を守らなさい」と「米国の自由」も次に危い」というキャンペーンに米国民をまきこむこと。

⑥日米の「不拔のパートナーシップ」とやらを誇示し、日米両帝国主義の新植民地主義的抑圧に苦しみつつも、血まみれの解放闘争を前進させるアジア人民を有事介入のどう喝で圧倒せんとするものだ。

アジア人民への血債にかけて安保一日「韓」体制打倒！ 天皇訪米絶対阻止！

かつて六〇年代後半にいち早く「日本軍国主義復活」を暴露した朝鮮民主主義人民共和国は、天皇訪米に対してもその真の意図を見ぬき、「朝鮮への敵対は許さなさい」と言っているのに対し、「親善訪問に反対しない」という社会党・総評、「対米従属反対」と見当違いの共産党（そこでは日帝の積極的な「日米防衛分担」提起等）に明らか軍事外交路線はかくされてしまう。等々の既成左翼の現状はまさに腐臭を放っている。

朝鮮の現下の内戦の状況に目をとざし、「韓国政治犯救出」一般を日帝の侵略反革命、朴を通じた支配こそが元凶であることを無視して主張するという、自己の主体的立場を欠落させた市民主義的水準に墮落した一部新左翼もまちがっている。こうした諸君に限って「天皇訪米は三木訪米ほどの意味もない」と言い放つのだ。

こうした誤りは、買収された日本労働組合運動しか眼中にないカクマル等純プロ主義者には必至である。アジア人民の利害に立脚しその立場からみない限り、現代史の巨大な転換の真相は理解しえない。

昨秋、狭山決戦を通じつつ、被差別大衆とつれ石川一雄氏の血叫びにええぬく中で整風運動を貫徹し、フォード来日訪「韓」や四・一九闘争を、金芝河氏の不屈の闘魂に呼応して血みどろの實力闘争として闘ってきたわれわれはそれを断言できる。彼等の立場の違いは試練の中で分岐したのだ。

実際、天皇訪米II日米血盟強化が、決起するアジア人民の血にうえた狼どもの所業であることなど明らかなことではないか。「高度成長」なるブルジョアジーの山吹色の夢によわされ、春闘抑圧インフレ悪化にも一向に目ざめないこうした連中を尻目に、われわれは不断の抑圧と闘争によって透徹した目をもつ被差別大衆・第三世界人民と固く連帯し、「天皇訪米阻止」に精魂を傾けつく

すのでなければならぬ。

しかし純プロ主義者の白日夢にもかかわらず、「天皇訪米」は日本労働者人民の運命にとつても巨大な転換点となるうとしてい

このことは沖繩人民の「皇太子訪沖糾弾」海洋博粉砕の闘争や基地住民の闘い等、日帝足下の反乱が一方で告知している。

つまり、日米防衛分担等の安保一日「韓」体制強化II朝鮮出兵策動が、ベトナム戦争下で沖繩人民・基地住民を襲ったそれと比較にならぬ犠牲性をしいるからだ。「他民族を抑圧する民族に自由は無い」というエンゲルスの言をまっまでもなく、侵略加担は人間をして殺人鬼に変え、やがてその生命をも奪う。

かつて日本人民は天皇制国家権力に屈し、労働者人民は一切の団結を失い、「皇軍」の兵卒として、千万を上回る中国人民、そして東南アジアの民衆を虐殺した下手人となり果てた。その第一歩が明治の「琉球処分」であり、決定的な転換点が朝鮮出兵II併合と世界に類を見ない苛酷な植民地収奪であった。

このアジア人民に対する血債の一部でもわれら日本労働者階級人民は償還しえてきたであろうか。

否、断じて否である。

逆に日帝は朝鮮戦争を契機に復活し、米帝の朝鮮侵攻を総評が支持する等、血債はつくりゆけばかりではなかつたろうか。

加うるに、天皇訪米II朝鮮出兵策動である三十年にして利子すらかさむ血債にかけ、天皇訪米を阻止し、朝鮮出兵を粉砕することは日本人民の不可避の責務である。

沖繩人民はこのことをはつきりと見ぬき決起している。日帝に屈服させられたがゆえに侵略の尖兵化したがゆえに、アジアや太平洋で兵士は命を奪われ、米軍による「鉄の暴風」の下で、老若男女の見境もなく惨殺されたばかりか、日本軍が沖繩人民を虐殺したのだ。天皇ヒロヒトの下に一九〇一年とされた日帝は、延命のために沖繩をいけにえとして、今復活した。

昨年フォード来日時や今回の訪米など、「元首」としての天皇の登場、「元首名代」としての皇太子訪沖に対して、アジア侵略と沖繩抑圧の歴史に対する最高戦犯II天皇ヒロヒト糾弾の立場から闘うとしても、それは絶対的に正当である。金融資本II独占体の侵略膨張に権威を与え、人民の自由をその絶対権力下に圧殺したのがドイツではヒトラー、日本では東条英機をあやつった天皇ヒロヒトだったからだ。史上最大の殺人者は徹底糾弾されなくてはならない。

人民の武装決起で、帝国主義天皇制攻撃爆発！

だが、この戦争と革命の激動期一九七〇年代中期に、天皇が前面化してきたことの意味を見ないなら、真にアジア人民・沖繩人民に込め、血債償還の糸口をつかむことなど不可能であろう。

すなわち、ベトナム解放に朝鮮危機が連続し、帝国主義がその強行突破のために、侵略反革命戦争を開始せんとはかる、真に戦後における日帝未曾有の危機下に、最後の切札として帝国主義天皇制攻撃がかけられてきていくことの現実的意味を把握しなくてはならない。

それは戦後日本の支配理念であった「米帝の核のカサの下の平和」及び「議会制民主主

義」が、内外人民の反撃によって決定的に破壊した今日、帝国主義ブルジョアどもが、議会の空洞化を促進しつつ、行政権力の肥大化をはかり、国家権力を官僚的・軍隊的・警察的権力へと転成せんとし、現に選挙法改悪I小選挙区制II憲法改悪II海外派兵・核武装・徴兵制への突撃を開始した今日にあって、それでもなお人民を集約し、だましこむためにおし出されてきたのだ。

その意味は第①に、全く不当な、何の正義性もないままにアジア人民や被差別大衆、革命的左翼を抑圧せねばならぬ軍隊・警察・官僚・公安警察・資本家・右翼暴力団等に、不条理な、しかしそれゆえに価値があるかのような幻想的立脚点を与えるためであろう。歴史と人民の正義に対するイヌどもであるからブルジョアの不正蓄財や手前の食い扶持だけでは死ねないというわけだ。

しかし第②に、大きく、アジア人民との連帯へと動き始めた人民の心を、民族主義I国家主義的にゆりもどさんとする策動を見る時、事態は深刻である。

日本人民の土地・財産保守の意識に訴えつつ、家族制度・企業防衛II生活防衛意識・部落I朝鮮人差別、その他注意深く温存されてきた封建的ともいえる諸要素を悪用した人民差別I分断攻撃が圧倒的に開始されつつある今、たしかに平担ではないアジア人民連帯行動よりも、安直にして普及せる排外主義II差別主義へと屈服してゆく転向者どもは少なくない。その連中の口実に「天皇と国家」は、かつてほどの神通力はなくとも一定の根拠にはなる。ましてや農民や中小零細工業者を排外主義へ動員するに当って、かつての皇民教育は延命している。まさに反革命ブロック形成のカナメとして天皇は位置するのだ。そうならば自民党政治も小選挙区制さえ通せば一応安泰であり、帝国主義ブルジョアはこのブロックに依拠してあらん限りの独裁をふるえるというのだ。

しかしそんな敵権力の都合の下で人民はどうなるのだろう。

今でさえ権名密約にもとづく外国人登録法攻撃や入管体制下に在日朝鮮人は理不尽に圧迫され、無実の部落青年石川氏は無期限の監獄生活を強要され、沖繩差別I全島軍事基地化の上に朝鮮出兵策動がなされている。それらが天皇を支柱とし暴力的・理不尽な権力弾圧として、加うるに屈服した連中I民社・同盟・JOC、更に社共等をも尖兵として、被差別大衆・闘う労働者人民・アジア人民に現に襲いかかりつつあるのだ。

われわれは生命をかけ、肉を弾と化してこんな策動と闘う。天皇訪米と七〇年代中期にける敵の最後の生命線、安保一日「韓」体制強化の一連の策動を全人民の武装決起の先頭に立って断固として粉砕する。侵略反革命戦争のための帝国主義天皇制攻撃を絶対に許さず、アジア人民への血債にかけて闘いぬく。

八、○戦旗派政治集会を、この決意を高くに宣言し、更に闘う全労働者人民の決意とすべく、巨大な波動を何としても創出すべき闘いにつく出発点としなくてはならない。

七・七猛省精神を更に深め 安保一日「韓」体制打倒！

八・一〇戦旗派政治集会の任務は、第二に昨年七・七猛省集会を一つの頂点とする整風運動と、アジア人民・被差別大衆への血債にかけて闘ってきた諸闘争の成果と到達点を総括することにある。とりわけ今春以来、三・一金芝河アピールに込めて闘ってきた四・一九闘争や、沖解同と共に闘ってきた海洋博粉砕・沖解開放闘争を頂点とする安保一日「韓」体制との対決において闘い取った地平をふまえておこなうてはならない。

なぜなら、ベトナム解放を機に激変するアジア情勢を正確に把握すると同時に、アジア人民と強力に連帯しつつ、日本労働者人民の広汎な決起を実現するには八危機の怒号や宣伝だけでは決定的に不足しており、真に闘いの原点となり、バネとなる思想が問題であり、われわれのこの一年の階級実践は、それを明らかにしてきたと確信をもって断言できるからである。

その思想内容とは、端的に言えば、八血債一猛省精神Vであり、この貫徹のために、われわれは昨夏を頂点とする同盟実践の整風運動を行い、狭山闘争においては八石川氏の血叫びに込めぬことV、日韓闘争においては八三・一金芝河アピールに込めぬことVを固く誓い、掲げ闘ってきた。この思想に支えられたからこそ八実践的に込めぬことが問題となり、狭山九月決戦やフォード来日訪「韓」阻止実力闘争、四・一九以降、街頭闘争での戦闘的実力闘争、肉弾戦を貫徹してきた。また、こうした魂をもたぬ分派主義者、足立商會グループの急速な没落と絶望的なあがきをつくりだし、わが戦旗派の前進を実現させた。

実際、一般的に課題を闘うだけでは、今日の錯綜した時代において反動化は避けられないのであり、たとえば足立グループの如く組合運動を組合主義的に取り組むならその存立基盤に規定され、純プロ主義に転落し、わが戦旗派へのコンプレックスから、何から何までサルまねしたがる土方らとの「左」右対立を生み出し、分解のタネを育てることしかできなかつたのである。「皇太子訪沖阻止」七・一七闘争での足立グループ三分解はそれを象徴している。

ともあれ、わが戦旗派は、昨年七・七政治集会を猛省集会としてうちぬき、同盟整風運動の成果を集約した。われわれが猛省しなくてはならなかつたのは、第一に日帝の侵略の歴史、及び現下のアジア侵略反革命の現実を真に受けとめること、の曖昧さ、金芝河氏の言う「日本人の自己否定の上に日朝人民の連帯がある」ことへの無自覚であった。

社共型の小ブル平和運動が「原爆一空襲一飢餓の被害者」、つまり自己肯定を基礎としたために、経済成長一一定の生活保障の中に完全に解体され、米帝に対する党派性はあっても、日帝の現実の侵略反革命へは一言も発しない、まさに買収された抑圧民族一体制受益者へと墮落しきつた中において、確かにわれわれをも含む新左翼は、ベトナム一七〇年安保を通じて帝国主義と鋭く対決してきた。しかしこれとて、韓国・アジア人民との共同闘争が何より問われるに至つた七〇年七・七闘争での差別発言という形で限界を暴露してしまつた。しかもプリントにあっては、そこでの自己批判もかわらず、本当の内的切開は更に四年以上遅延した事態を猛省しなくてはならなかつた。

同時にこれを契機として、「帝国主義と断固対決している」ことを免罪符として自己の党生活・活動を被抑圧人民への連帯を基準にして切開していかない傾向を整風運動として克服せんと努力を開始した。一切の主観主義・個人主義を排し、人民の利害を唯一の基準として主体的に闘うべく「主体性」を確立せんとつとめてきた。

われわれはこれを「七・七猛省精神」として骨肉化し、アジア人民・被差別大衆への血債にかけて闘うことを決意したのだ。

わが戦旗派は六七年一〇・八羽田闘争、七二年五・一三沖繩「返還」粉砕闘争を全力を尽して闘いぬいた伝統を精髄としており、ベトナム・沖繩人民のために生命をも投げうつ党風は、こうした七・七の飛躍のテコとなつた。真にラジカル（急進的）なものとは同時に根底的なものであり、一切の主観主義・誤まれる理論主義を克服すれば、生きて闘うために必要なことはおのずから見えてくる。

だが問題は革命的認識だけでは意味をなさないことにある。とりわけ、人間的で正義を貫くことが、悉く権力の意向に立し、弾圧にさらされる今日において然りである。われわれは、七・七猛省精神を実践的に貫徹することに全力をあげた。

昨秋闘争を通じて、われわれはこれを骨肉化したと言える。

石川氏の血叫び・金芝河アピールに込め、実力決起

昨秋狭山決戦を、われわれは八・一八現地調査にふまえ、狭山現地ハンスト戦と、九・三〇・二六、一〇・三一を頂点とした高裁包囲大決起の結合として闘いぬいた。石川一雄氏のアピールに本当に込めぬ道は、部落差別によって人民を分断抗争させ、上層を抱きこんで人民を抑圧してきた差別者としての労働者人民が、猛省にふまえ、八狭山差別裁判糾弾・無実の石川氏奪還・日帝寺尾体制打倒Vの巨大な闘いを創出することになった。

われわれはこの一翼を担いきた。被差別大衆の大決起と労働者人民とで九・二六には十数万が高裁を包囲したのだ。「差別デッチ上げ逮捕」「権力犯罪」としての狭山差別事件は、ブルジョア・マスコミですら公然と認めるに至り、数回の百万人署名はたちまち人民の支持を得た。

だが日帝は差別分断支配体制へと人民が追撃することを恐れ、七四春闘前進や七月参院選での「保革接近」によって揺らぐ権力の崩壊の予見におびえ、ファッショ的な強行突破をはかった。あの寺尾「無期判決」一一〇・三一大暴虐である。

権力の都合でふみにじられる部落青年：このくり返しを何度許してしまつたことか。寺尾は「あと二三年で出られますよ」と判決に加えたという。この欺瞞性。被差別大衆と労働者人民の合流におびえ、人民の決起を恐れるだけの政治的判決。石川氏の怒りはわれわれ自身のものである。この怨みを忘れてはならぬ。とりわけ寺尾判決を美化し、八鹿事件等で部落大衆攻撃に明け暮れる日共のさばらせていることに体现される労働者人民の闘いの不足を反省し、階級的復讐にとどまらぬ一層の決意をわれわれは固めた。日帝は一〇・三一大暴虐を含め、昨秋の危

機をきつかけとして、権力弾圧の激化を露骨にしてきた。金大中事件に対するソウル大決起や民青学連事件等、韓国人民の必死の闘いが朴を追いつめていたことへの抜本的テコ入れと連動する国内の破防法弾圧強化である。

フォード来日訪「韓」は明らかに朴独裁、その黒幕日帝に対して共同軍事行動の保障等を通じた「GO!」サインとなり、以後、朴による緊急措置連発・大量逮捕一死刑等人民弾圧の突破口としてしまった。この転換は日帝にも選択を迫り、天皇訪米決定は、韓国人民を国内破防法弾圧の一里塚となつた。フォード来日時の十六万人厳戒体制やアバート・ローラー作戦に抗して、われわれは朝鮮人民への血債にかけ、来日訪「韓」阻止を闘った。仲浦田公園付近の肉弾戦を、全体二百余の逮捕中、わが戦旗派は四十名逮捕という弾圧をはねのけて闘った。

更に三・一四・一九闘争を、文字通り命をマツに闘う韓国人民の「国民投票」ポイコット、東亜日報・高麗大闘争と連帯し闘いぬいた。しかし朴が罪もない「人民革命党事件」被告を密殺し、次々に命を奪っている事態が日米のテコ入れによって初めて可能となつている事実は、フォード来日訪「韓」前後の弾圧状況一つだけを見ても明らかであるだけにわれわれは怒りを禁じえず、この悔しさを決定的なバネにしなくてはならない。

こうした七四年の総括として、われわれは十二・一五労共闘政治集会を組織した。わが闘いの前進は明らかであったが、敵の加速的な強権的動向化に、より決定的に対決するためには、ベトナム一韓国情勢に動揺する帝国主義者の最後の生命線一安保一日「韓」体制との対決に死力を尽さねばならないこと、血債・猛省精神で更に武装した革命的な戦旗派魂を復権させ、左翼的戦闘的に闘いぬくことが宣言され、われわれは更に大きな階級的責務を担つたのである。

今春闘争をわが戦旗派は誰よりも戦闘的に闘いつつてきた。四・一九一五・一五一六・一五二七・一七一九の戦闘的デモンストレーション。政治主張においても、金芝河アピールやベトナム人民の勝利に学び、安保一日「韓」体制と全力対決すること、天皇訪米にこそ一切の敵の攻撃が凝縮され、今こそこの打倒とアジア人民への血債にかけて決起せんことを訴えつつ、自ら血路を開いてきた。

とりわけ四月サイゴン解放以来、階級攻防は一日の怠惰が十年の悔いを残す決定的段階に突入している。

われわれは、四月の連続行動や六・一五闘争を通じて三十年戦争における正義の勝利を心底から祝し、ここでもただ自己の安穩と金銭のために民族的自由や生命さえ奪い、侵略した帝国主義に怒りを燃やし、同時にベトナム人民に学び、その不屈の持久戦争をわが全党人民のものとし、誓って来たのだ。しかし追いつめられた敵の姑息な反撃もす早かった。たとえば、四月に打ち上げられた防衛庁長官「坂田構想」である。これは「日米防衛分担構想」とも呼ばれ、「日米共同作戦」「日米軍事共同調整機関の必要」といった許しがたい反アジア・反人民的内容にみちている。日帝は「非核三原則」のポーズすら投げすてたのだ。

防衛庁は議会対策でしかない「シビリアン・コントロール」とやらは建て前としても消え、海・陸・空の三幕僚（制服組）が日米一

日「韓」の情報・業務連携を、昨年だけでも十八回以上行っているのだ。

議会の形骸化はどこでもはつきり表われている。公安警察が刑事警察から分離していることも「企業爆破事件」捜査で実証された。機動隊の増強も明白であり、「都の定員規制」ほど実をもたぬ笑話も少ない。

だが敵も危機感を強め、弾圧を強め、天皇をもち出すなら、それらもろとも打倒するまでだ。

われわれは四月以来の、戦闘的実力闘争・戦闘的デモンストレーションの構築を足がかりとしつつ、断固たる武装闘争をもって闘おうではないか。

今春闘争は、金芝河韓国民衆や沖繩人民に呼応したこと、戦闘的デモの確立の他に、大衆的共同闘争においても一歩前進した。四・一九以来の労活との共闘の他、闘いの必要に応じて市民団体等とも共闘し、質量ともわが闘いを豊富化する手がかかりをつかんだ。

最後に、五・一五闘争一七・一七―一九海洋博粉砕―皇太子訪沖阻止闘争を頂点とする沖繩解放闘争の総括である。

沖繩の反革命統治を痛打し、激闘の三か月へ火蓋を切った皇太子訪沖阻止の闘い

アジア侵略反革命、とりわけ朝鮮出兵を急ぐ日帝は、出兵前線基地として沖繩の全島核軍事基地化と、城内平和づくりのための沖繩の反革命統治に腐心している。日帝足下の被抑圧人民を、アジア被抑圧民族への侵略の尖兵にすることこそ、第二次大戦と今次戦争準備に限らず帝国主義の常である。米帝も黒人兵をベトナムの弾よけにし、BPPの反乱の伏線となったが、第二次大戦で日米の敵にもにじゅうりんされた沖繩人民は、あらゆる闘いを創出してこの策動に対決している。

とりわけ「皇太子・皇族の訪沖阻止」は沖繩百万の一致した闘いであった。われわれは労働者人民が天皇制に敗北することによって更に沖繩人民に君臨し、抑圧と収奪の限りを尽した上、虐殺することを許してしまったあげく、アジア侵略を行った歴史への血債にかけて、同時に沖繩の全島軍事化をはかる海洋博が、まさに朝鮮出兵の基地づくりであることを見ぬき、これと対決しぬいた。

朝鮮危機の中で米軍に次ぐ自衛隊基地に圧迫される沖繩人民の生活は、返還後急速に暗転しており、日帝独占体の収奪によってインフレは日本「本土」の倍なのである。多くの沖繩青年が故郷を出てきて、この差別を基本とする日本企業社会は、最「下」層労働力としてしか彼らを扱わず、あらゆる差別・迫害を加えた上で、沖電気の島添さん差別解雇に象徴される攻撃を加えた。

七二年五・一五沖繩「返還」に対して、唯一武装闘争を五・一三神田戦闘として闘いぬき、一三八名逮捕―一〇名起訴の弾圧をあびながらも、何としても沖繩人民と連帯せんとした、わが誇りとする革命的伝統を継承しつつ、われわれは今夏の焦点、海洋博粉砕―皇太子訪沖阻止を闘いきった。とりわけ皇太子訪沖阻止の闘いは、沖繩の反革命統治攻撃に打撃を与え、人民の巨大な反撃ののろしとなった。

この闘いを通じ、被抑圧民族・被差別大衆のためにこそ闘うわが戦旗派の組織と思想内容は更に打ちきたえられた。

同時に七・一七―一九皇太子訪沖阻止―海洋博粉砕を断固たる実力デモとして貫徹したわが闘いは、破防弾圧体制を撃破し、沖繩の反革命統治攻撃の出鼻をくじき、八月三木訪米・九月天皇訪米を頂点とする激闘の三か月の突破口を切り開いたのであった。

### 不拔の第三次ブント建設をもつて、ブントの革命的再生を刻印しよう!

すでに明らかなく七〇年代中期は戦争と革命の激動に終始せざるをえない。とりわけ敵の中央集権的で暴圧的で陰湿な攻撃をハネ返すには、要求される防禦や突撃のあらゆる闘いを強力に推進しうる前衛党の建設が極めて重要である。

しかもこの闘いは街頭徴募によってでなく、鉄火の階級の実践に耐えぬく党員によって、何年もの継承にふまえて実現されなくてはならない。

わが戦旗派は、ブント十余年、とりわけ第三次ブント建設五年の歳月に培った諸内容を改めて問い、七〇年代中期大昂揚を実現しぬく方向を明示し、みなぎる決意で天皇訪米を阻止することを端緒として、自らこの困難な責務を負う覚悟である。

従って八・一〇政治集会の第三の任務は、ブントの革命的再生を宣言し、その全内容を世に問うことであらうではない。

七〇年代安保闘争の渦中における第二次ブントの終息以降五年、鉄火の階級闘争がわれわれに与えた試練は、この過程できたえぬかれた戦旗派を生み出し、その一貫した闘い―第三次ブント建設の意義をより一層明らかにしている。この一年の闘いは、われわれの前進とは比較も不可能なブント諸派の解体状況、その腐臭を放つ様を見せつけたからだ。

わが戦旗派の出発点は、闘う人民に真に責任をもちうる党としてブントを再生せんとすることにあった。

第二次ブントが数多くの献身的・戦闘的運動家を擁し、六七年十・八羽田闘争等、革命的・大衆的な闘いを担いきてきたにもかかわらず、広汎な人民が最も党の指導性を求めた時に空中分解した痛苦な事態は、やはり無責任であり、人民に対する党の債務となった。この意味を主体的に受けとめ、われわれは第二次ブントの欠陥を一つ一つ克服しようとした。

第二次ブント分解は指導部の団結創造の失敗にあり、連合党としての出発が固定されたことにある。党としても現実社会の矛盾を反映するのであり、人の団結は一時的であり、矛盾は普遍的であるのだから、不断の整風運動を通じて、人民の利害に立脚した党的・革命的実践をつくり出さぬ限り、現実の重みに逆に解体される。ことに第二次ブントは自治会執行部運動に依拠しており、学生大衆の気分や個別学内運動に規定されがちだったからこそ、特に党建設のための目的意識性は必要だった。

こうした認識に敵対し、居直ることから、かつての野合右派や足立グループのごとき反前衛運動が生まれる。

敗北の経験に学ばず、わが同盟を誹謗中傷することで延命しようとしても、そんな行為

は人民解放の武器として党を打ちきたえる真に主体的な闘いとは無縁であり、自己の腐敗と意味のない分解をまねくだけということは事実をもって明らかとなった。

たしかにわれわれも誤りを犯さなかったわけではない。理論主義・主観主義に陥ったこと等がそれだ。これを主体的に切開し、病いをなおして人を救う立場に立つのか、病気をあてを認めず、治療を拒否して腐っていくのかの相違、これだけが悪魔のごとき生命力をもって甦えつたわが第三次ブントと諸雑派の惨状との差異をつくり出した。

第二次ブントからは、過渡期世界論や武装闘争の伝統を発展可能なものとして継承したにすぎなかったわれわれが党―革命勢力を建設していくには、とりわけそうした謙虚な作風の有無は決定的であった。

### カクマル・足立の敵対をふみこえ九月決戦に勝利せよ!

七三年春の十二中委をめぐる足立グループ脱走はこれを典型的に現わしている。つまり労働運動の創造の方向をめぐる対立である。

七二年夏の十一中委は、帝国主義の侵略反革命に対決し、被抑圧人民に連帯しぬく革命的労働運動の出発点となったのだが、足立グループはこの意義を否定し、逆に彼らの一部がかかわっていた組合主義的实践によって純プロ主義の病いに陥り、「青婦協路線」を対置したのであった。

しかも足立グループはこの誤りを固執し、昨年一・一八フォード阻止を闘って大量逮捕―負傷の弾圧をうけたわが同盟への背後襲撃やたび重なる沖繩人民襲撃を経て、革命的人民との敵対矛盾を作り出した。

足立グループはまた、わが同盟が死力を尽して闘った七二年沖繩「返還」粉砕―五・一三戦闘の意義すら否定し、更に日帝による沖繩の反革命統治を美化するに至っている。「沖繩奪還論」への転落、日帝独占体による沖繩収奪の是認、文化財破壊の肯定等は、この現れた。反共民同―西田がひきいる排外主義団にふさわしい末路ではある。

ともあれ、五年にわたる第三次ブント建設の苦闘、特に七・七猛省集会を一頂点とする整風運動を通じ、先進的なアジア人民に学ぶ党風を確立したことによって、ブント再生の闘いは一歩の確実な前進をとげた。

組織的にも武装闘争堅持に不可欠な地区党構造―革命的労働者党の骨格はわれらの誇りであり、産別戦線党へと崩壊的に解消した足立グループ等の合法主義者ぶりはこども際立つ。

同時にこの一年、われわれは戦闘的党風の下の、日本革命的労働運動の再建に成功し、筑波共闘、高共闘の強化―拡大にも勝利した。だが真の試練は未だ始まったばかりである。九月決戦に至る激闘の三か月は容赦なくきたえるであろう。凶暴な破防弾圧に抗し、全党全人民の武装決起を実現しぬけるのか、すべてはわれわれの決意と団結にかかっている。

第三世界人民に学び、日本人民の政治的決起を生命をかけて実現する魂をもたぬ限り、底なしの腐敗に陥こむことは明らかだ。

反革命カクマルを見よ! ベトナム人民の勝利を、帝国主義ブルジョアに唱和して口をきわめてのしっている。